

安全・安心な食品づくり

基本的な考え方

「食べる喜び」をお届けする企業として、安全・安心のために品質を徹底的に追求することは基本です。また、より多くの皆様に安全・安心をお届けするため、食物アレルギーの取り組み、サプライチェーンの安全性などを追求していきます。

貢献するSDGs

「CSRの5つの重要課題」の中心的対象となるSDGsの目標

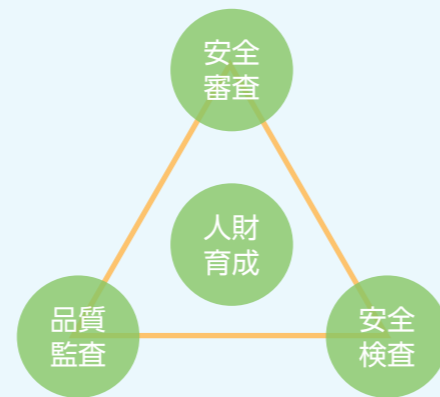


品質保証の取り組み

ニッポンハムグループは、安全・安心、そして満足・感動の品質をお届けするために、独自の品質保証体制を構築し、企画・開発から製造・販売に至るまで当社グループすべてのプロセスにおいて品質への取り組みを推進しています。

品質保証体制

お客様に安心して召し上がりいただくために、安全で安心な商品をお届けすることが私たちの責任と考えています。そのために、安全審査・品質監査・安全検査の3つの機能を有機的に連携させ、さらにこれらを支える人財育成を進め、安全確保に取り組んでいます。



信頼性のある検査体制の構築に向けて

国際的に通じる検査体制の構築のために、ISO/IEC17025の認定取得を進めています。当社グループ全体では、これまでに日本ハム(株)中央研究所・デリ商品技術開発室、南日本ハム(株)、タイ日本フーズの4事業所で認定を取得しています。

お客様の安全・安心を求める声にお応えするために、信頼性の高い検査を通じて、当社商品の安全性確保に努めていきます。



日本ハム(株)中央研究所 品質科学センター

お客様とともに

日本ハム(株)は、2017年に「消費者志向自主宣言」を発表し、消費者視点での取り組みを推進しています。また、ニッポンハムグループとして、「聴く」・「知る」・「活かす」のコミュニケーションサイクルを循環させ、お客様満足の向上と商品・サービスの開発や改善につなげます。

この一環として、お客様の声(録音)を聴く活動を行っており、2017年度は、工場などで約10,000名の従業員が参加しました。また、専用のモニタリングルームで、直接お客様の声を聴く活動も行っています。私たちにとって、お叱りやご不満の声は気持ちを引き締め、お褒めの声は大きな励みにつながります。

これからも、お客様の声を大切に受け止め、商品・サービスの開発や改善に活かしていきます。

ニッポンハムグループ全体のお客様相談窓口受付件数(2017年度)

約 **143,000** 件



CSR調達の取り組み

サプライチェーン全体のCSR調達

2017年4月に調達における基本的な考え方を定めた「ニッポンハムグループCSR調達方針」を制定しました。「安全・安心な食品づくり」は、自社だけでなく、サプライチェーン全体を通して取り組むことが必要です。また、社会的責任を果たす調達には、公正で公平な取引・人権・環境への配慮も求められます。

持続可能な調達を実現するために、具体的な取り組み項目を定めたガイドラインを制定し、お取引先とともに取り組みを進めていきます。

ニッポンハムグループCSR調達方針

1. 法令・社会規範の遵守と態勢の構築
2. 商品・サービスの品質・安全性の確保
3. 公正・公平な取引
4. 人権の尊重
5. 労働における安全衛生
6. 地球環境への配慮

CSR調達とは

企業などが原材料や包装資材などの調達を行う際に、品質や安全性、価格だけでなく、公正な取引・人権・労働安全衛生・環境などの社会的責任にも配慮して取り組み、サプライチェーン全体でCSRを推進する活動です。

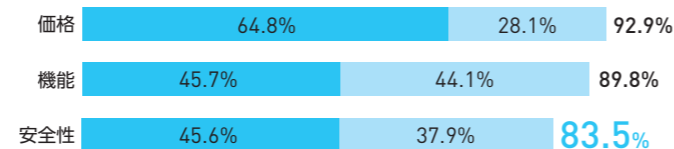
関連する主な社会課題

食品の自主回収件数(国内)



出典: 独立行政法人農林水産消費安全技術センター(年度数値)

「価格」、「機能」、「安全性」を意識して商品を選択する消費者が多数

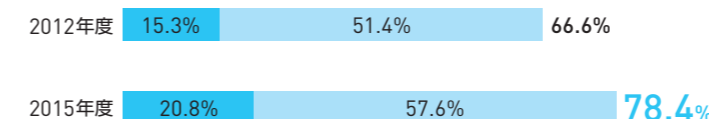


■ 常に意識する ■ よく意識する

※「あなたは商品やサービスを選ぶとき、以下の項目を意識することがどの程度ありますか」との問いに対する回答。

出典: 消費者庁「平成28年版消費者白書」

表示を十分確認するなど、積極的な行動を心掛ける消費者が増加



■ かなり心掛けている ■ ある程度心掛けている

※「表示や説明を十分確認し、その内容を理解した上で商品やサービスを選択する」の項目に対する回答。

出典: 消費者庁「平成28年版消費者白書」

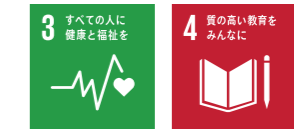
食とスポーツで心と体の元気を応援

基本的な考え方

食とスポーツを手掛ける企業として、食育活動、食文化の普及、スポーツの振興などを通して心と体の健康づくりに貢献しています。

貢献するSDGs

「CSRの5つの重要課題」の中心的対象となるSDGsの目標



スポーツと食の連動

鎌ヶ谷スタジアム カビーファームの運営

日本ハム(株)と(株)北海道日本ハムファイターズは、鎌ヶ谷スタジアムに菜園「カビーファーム」を開設しました。運営にあたっては、農業協同組合(JA)やシルバー人材センターの協力をいただいています。野菜を育て、調理し、食べるまでの一連の体験と「北海道日本ハムファイターズ」の栄養指導を行っている日本ハム(株)中央研究所の管理栄養士からの食事のアドバイスなど、食べものの大切さを伝え、食を楽しむ体験型のイベントを行っています。



「カビーファーム」でのイベントの様子

食育スローガン

食のふたつ、楽しみまう!



2005年度～2017年度
ウインナーの手作り体験教室参加人数

延べ **25,236**名

次世代育成に向けて

10年以上続く出前授業「ウインナーの手作り体験教室」

ニッポンハムグループは、2008年に食育スローガンと食育活動方針を定め、年間500件以上の出前授業や料理教室などを実施しています。出前授業「ウインナーの手作り体験教室」は、食に携わる企業として「正しく食べる」「食を楽しむ」「食を大切にすること」を伝え、子どもたちの心と体の元気を応援することを目的に2005年度から10年以上にわたって実施し、2017年度までに、延べ25,236名の小中高生を中心に参加いただきました。授業では、ウインナーがどのように作られているのかを五感を通して体験し、「食べものを大切にすること」を育む内容となっています。

研究を通じた健康サポート

イミダゾールジペプチドの研究

ニッポンハムグループでは、食肉成分の研究を通して、元気な体づくりを応援しています。イミダゾールジペプチド(以下、イミダ)は、鶏肉に多く含まれる有用成分で、イミダと運動パフォーマンスの関係を長年研究してきました。最新の研究では、ランナーにイミダを摂取させると持久力が向上することを確認しており、イミダがマラソンやジョギングにも有益な成分であることが示されています。また、イミダに関する総合情報サイト「イミダLabo」にて、研究データやイミダを多く含むレシピの情報を公開しています。



<http://www.imida-labo.jp/>

スポーツ選手への栄養サポート

「香川ファイブアローズ」の選手への栄養指導を開始

日本ハム(株)中央研究所は、プロ野球チーム「北海道日本ハムファイターズ」、Jリーグクラブチーム「セレッソ大阪」育成組織の選手への栄養指導を行っています。

2017年度より日本プロバスケットボールBリーグ「香川ファイブアローズ」の選手へのサポートを開始しました。2017年9月に行った栄養指導講習会は、同チームでは初めての試みで、選手、監督など19名が参加しました。シーズン開幕の前に、必要な食事量の目安や体脂肪を増やさない食事など、シーズン中に役立つ栄養の知識を提供しました。



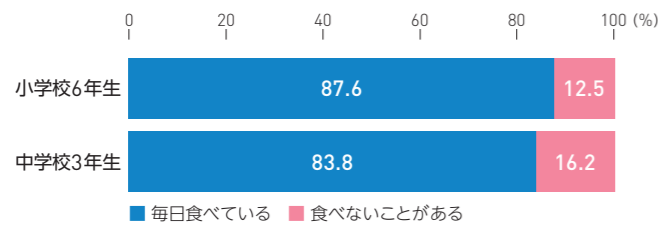
栄養指導の対象選手の数*

316名

*2017年度に栄養サポートを実施した北海道日本ハムファイターズ、セレッソ大阪アカデミー、香川ファイブアローズなどの対象選手数

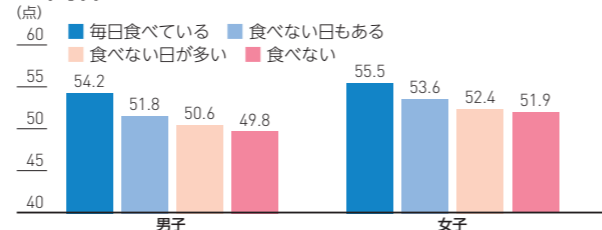
関連する主な社会課題

朝ごはんを食べないことがある小・中学生の割合



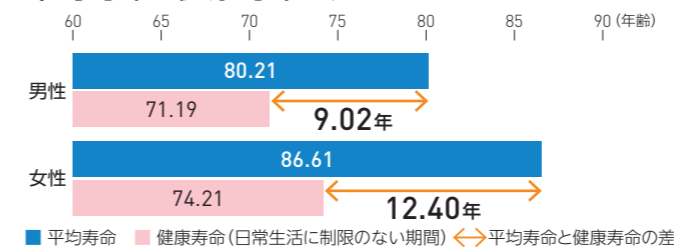
出典: 文部科学省「平成27年度全国学力・学習状況調査」

朝食の摂取状況と新体力テストの体力合計点との関係(小学校5年生)



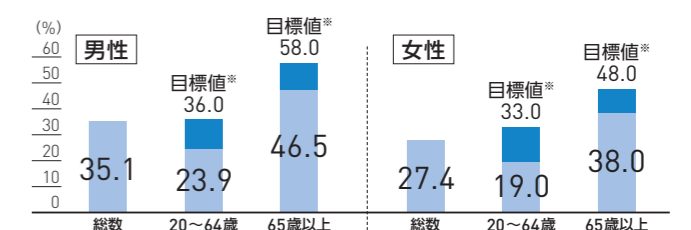
出典: スポーツ庁「平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」(平成27年12月発行)

平均寿命と健康寿命の差(2013年)



出典: 内閣府「平成29年版高齢社会白書」より作成

運動習慣のある者の割合(20歳以上、性・年齢階級別、全国補正值)



*「健康日本21(第二次)」における目標 出典: 厚生労働省「平成28年国民健康・栄養調査結果」より作成

従業員が生き生きと活躍できる職場

基本的な考え方

ニッポンハムグループは、「従業員が真の幸せと生き甲斐を求める場」となることを目指しています。そのために、従業員の意識・能力開発、ワークライフバランス、ダイバーシティ、心と体の健康維持などに取り組みます。

ダイバーシティの推進

働き方改革の取り組み

ニッポンハムグループでは、2020年までに指導的な立場で活躍する女性従業員の割合を12%とする目標を掲げるなど、多様な人財の活躍を推進するためにさまざまな取り組みを行っています。

日本ハム(株)では、育児や介護と仕事の両立を支援するため、2017年度より在宅勤務トライアルを開始しました。今後は一部の事業所で実施しているフレックスタイムの対象範囲を拡大するほか、「男性の家事・育児参画啓蒙活動」など、男女問わず誰もが動きやすい職場環境づくりを推進します。



人財育成

MBO (目標管理制度)の拡大

「ニッポンハムグループ 求められる人財像」を人財マネジメントの根幹に置き、「採用」「教育・育成」「評価・処遇」「異動・配置」のPDCAサイクルを効果的に運用し、戦略的な人財育成・人財活用に取り組んでいます。その取り組みとして、例えば日本ハム(株)では、2018年度より、MBO(目標管理制度)の対象者を拡大し、すべての正規従業員に導入します。MBOでは、組織の目標と従業員の個人目標を統合し、一人ひとりが個人目標を意欲的に達成する過程で充実感と成長を実感すると同時に、組織の業績が向上することを目指しています。対象範囲の拡大にあたり、2017年度には管理職を対象に研修を実施し、357名が参加しました。

貢献するSDGs

「CSRの5つの重要課題」の中心的対象となるSDGsの目標



ニッポンハムグループ 求められる人財像

確かな信頼	社内外を問わず 双方向コミュニケーションができる人財 「品質(商品・人)」「コンプライアンス」など社会的使命を認識しすべての「人」との信頼関係を構築できる
新たな創造	現状に満足せず商品やサービスなど 新しい何かを生み出せる人財 新たな価値を創り出し、時代をリードすることによって「ブランド価値」を高める
あくなき挑戦	高い目標に挑戦し続けられる人財 ニッポンハムグループの永続的な発展のために「積極果敢」に「高い目標を達成」する



コンプライアンス大会の様子

2017年度各社コンプライアンス大会

参加従業員数

約 **18,700**名

誇れる職場づくり

コンプライアンス活動の展開

ニッポンハムグループは、「みんなが互いのパートナー つくろう つなごう 誇れる職場」をテーマに掲げ、従業員同士のコミュニケーションを高め、元気がでる職場を目指しコンプライアンス活動を推進しています。

2017年度は、約18,700名がコンプライアンス大会に参加し、コンプライアンスの考え方を学びながら、一人ひとりの従業員が理想の職場像(すなわち誇れる職場)について考えました。さらに、意見交換しながら理解を深め、どのように日々の行動につなげていくかを検討しました。コンプライアンス活動がグループ従業員の自発的な行動につながるよう、取り組みを進めます。



ダンスアカデミーインストラクターによる健康に関する講演会

心と体の健康づくり

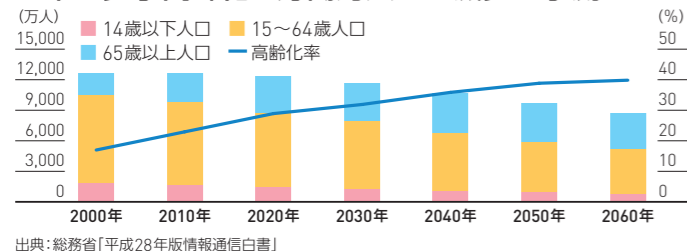
従業員の健康を推進する取り組み

ニッポンハムグループは、従業員一人ひとりの健康を経営基盤の一つとしてとらえ、その基本方針となるニッポンハムグループ「健康・安全宣言」を発表し、従業員の健康に対する取り組みを推進しています。

2017年度には、正しい食の知識を身に付けることを目的とした健康食育セミナー、禁煙促進を目指すスモーカーライザーチェックなどの取り組みを行いました。7月と10月に行った健康運動セミナーではセレッソ大阪、北海道日本ハムファイターズより元プロサッカー選手・元プロ野球選手、ダンスアカデミーインストラクターを招き、健康に関する講演会とストレッチ指導をしていただき、約170名が参加しました。

関連する主な社会課題

日本の少子高齢化と労働力人口の減少の予測

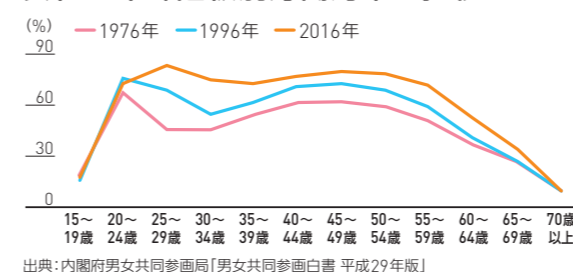


日本のジェンダー・ギャップ指数



※ジェンダー間の格差を経済、教育、保健、政治の各分野ごとに各使用データをウェイト付けして総合値を算出。
出典：世界経済フォーラム(WEF)「世界ジェンダー・ギャップ報告書(Global Gender Gap Report) 2017」

女性の年齢階級別労働力率の推移



日本の時間当たり労働生産性

OECD加盟35カ国中 **20**位(46.0ドル)

出典：公益財団法人日本生産性本部「労働生産性の国際比較 2017年版」

将来世代の食の確保

基本的な考え方

世界的な人口増加や経済成長に伴い、食資源への需要は増加する一方、供給にはさまざまな制約があります。また、国内では、畜産業の衰退が懸念されています。将来世代の食を確保するため、食品原材料の持続可能性への対応、国内畜産業の振興などを推進していきます。

貢献するSDGs

「CSRの5つの重要課題」の中心的対象となるSDGsの目標



増大する食糧需要に応える食肉の安定調達網の構築

バーティカル・インテグレーション・システムの強化

世界の人口増加に伴う食糧需要の増大に対し、ニッポンハムグループでは、食肉(牛肉・豚肉・鶏肉)の生産・飼育から処理・加工、物流、販売までをグループ内で一貫して行う「バーティカル・インテグレーション・システム」を構築し、安定供給の実現に貢献します。サプライチェーンをグループ内で構築することにより、調達リスクの低減や物流網による販売力の強化、一貫した品質保証体制の構築、資源の有効活用、お客様の声に対する迅速な対応も可能になります。

また、このシステムによるニッポンハムグループの強みを活かし、生産基盤の充実や、畜産農家のサポートなど畜産業の振興にも貢献していきます。

バーティカル・インテグレーション・システム

生産・飼育

処理・加工

物流

販売

食肉における調達網の構築

ニッポンハムグループは、安全・安心でおいしい食品をお届けしたいとの思いから、国内外に牛・豚・鶏などの生産飼育施設を保有し、事業を進めています。そのうち牛肉事業では、オーストラリアにおいて約6,000ヘクタールの牧場(右写真)で、年間約14万頭*の肉牛を出荷しています。

また2017年4月には、ウルグアイの大手食肉処理会社Breeders & Packers Uruguay S.A.社をニッポンハムグループに迎え入れ、牛肉事業の基盤強化を図っています。特にウルグアイは、南米の中でも干ばつが少ないなどの気候条件が優れているほか、国を挙げた牛肉のトレーサビリティシステムの徹底、成長促進を目的とした抗生物質の使用を禁止するなど、食の安全性の確保が進められています。

今後も北米・欧州など牛肉消費市場や食料需要が急増するアジアをはじめとする新興地域などの食肉需要に対応すべく、調達網の構築に取り組んでいきます。



※2018年3月期

次世代の人財育成

帯広畜産大学との包括連携協定の締結

食と人を大切に、社会に貢献することをともに掲げる帯広畜産大学と日本ハム(株)は、農畜産の活性化と将来を担う人財の教育・育成を目指し、2017年12月に包括連携協定を締結しました。

これまでも同大学の教員や学生が、ニッポンハムグループの農場や工場において実地研修を行っていましたが、今回の包括連携協定により、国際的に活躍できる畜産技術者の養成、学生に向けたより実践的な教育プログラムの実施、研究成果を社会で活用するための情報共有などを行い、畜産業の振興につなげていきます。



日本ホワイトファーム(株)知床生産部CS15農場における実習授業の様子。講義とは別に実際の現場を見学することは、学生にとって新たな発見の場になっています。

持続可能な畜産業を目指して

委託農家へのサポート

持続的な畜産業の発展のためには、農家の方々との連携が不可欠となります。中でも畜産業は機械化が難しく、手作業が多いため、作業負担の軽減が必要です。日本ホワイトファーム(株)宮崎事業場では、鶏舎の清掃サポートを行っており、鶏の出荷後、鶏ふんの搬出、鶏舎の清掃・消毒、次のひなの受け入れなどを農家に代わり請け負っています。これにより、農家の方々の労働負担軽減や休日取得にもつながるとともに、鶏舎の稼働率向上による生産回転数の増加、結果として収入増も期待できます。このように農家の方々の課題解決とニッポンハムグループの安定的な調達基盤の強化を目指し、今後も取り組んでいきます。



鶏舎の清掃の様子

関連する主な社会課題

世界人口の増加



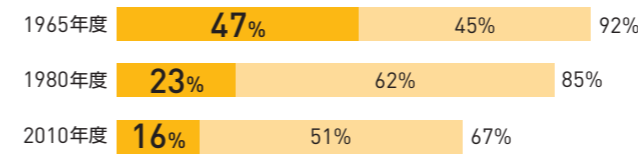
出典:総務省統計局「世界の統計2018」

食肉の世界消費量の増加



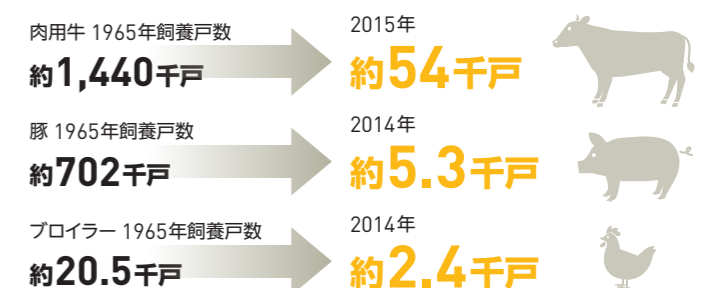
出典:農林水産省「平成29年度 2027年における世界の食糧需要見通し」

日本の畜産物の食料自給率の推移



■ 自給部分 ■ 輸入飼料による生産
出典:農林水産省「平成23年度 食料・農業・農村白書」

国内畜産農家数の減少



出典:農林水産省 畜産統計調査

CSRの5つの重要課題 地球環境の保全

基本的な考え方

気候変動などの地球環境問題には、すべての企業が責任を持って取り組む必要があります。サプライチェーンにおける温室効果ガスの排出量削減、エネルギー利用の効率化を進めると同時に廃棄物の発生抑制と削減に取り組めます。

貢献するSDGs

「CSRの5つの重要課題」の中心的対象となるSDGsの目標



環境目標

ニッポンハムグループは、中期経営計画において、事業活動の環境負荷低減を目指した環境目標を3カ年ごとに策定しています。持続可能な社会の実現に向けて、環境負荷の発生量の抑制に努めるとともに資源の有効利用に継続的に取り組んでいきます。

「新中期経営計画パート5」結果

取り組み項目		基準値	目標値	最終見込み ^{※4}
		2005年度～2010年度平均値	2015年度～2017年度平均値	2015年度～2017年度平均値
地球温暖化防止	CO ₂ 排出量 ^{※1}	816.2kg-CO ₂ /t	665.2kg-CO ₂ /t 18.5%削減 ^{※3}	688.3kg-CO ₂ /t 15.7%削減
	熱量 ^{※1}	13.6GJ/t	11.4GJ/t 16.0%削減 ^{※3}	11.8GJ/t 13.5%削減
省資源の取り組み	水使用量 ^{※1}	17.9m ³ /t	17.2m ³ /t 4.0%削減 ^{※3}	17.5m ³ /t 2.2%削減
	廃棄物発生量 ^{※1※2}	245.8kg/t	231.1kg/t 6.0%削減 ^{※3}	241.0kg/t 2.0%削減
	廃棄物リサイクル率	95.8%	98.0%以上	94.5%

※1 製品の製造数量あたりの原単位 ※2 ファーム糞尿を除く ※3 基準値からの削減率 ※4 速報値

「中期経営計画2020」目標

	基準値	目標値
	2012年度～2016年度平均値	2018年度～2020年度平均値
CO ₂ 排出量 ^{※1}	701.1kg-CO ₂ /t	645.1kg-CO ₂ /t 8.0%削減 ^{※3}
熱量 ^{※1}	12.0GJ/t	11.0GJ/t 8.0%削減 ^{※3}
水使用量 ^{※1}	17.7m ³ /t	17.2m ³ /t 3.0%削減 ^{※3}
廃棄物排出量 ^{※1※2}	207.5kg/t	195.1kg/t 6.0%削減 ^{※3}
廃棄物リサイクル率 ^{※2}	90.8%	94.0%

廃棄物は、ファーム糞尿を除く排出量原単位としていますが、中期経営計画2020からリサイクル率も原単位に合わせました。

結果と次期目標設定

2015年4月1日～2018年3月31日の「新中期経営計画パート5」においては、CO₂や熱量の削減に向け、工場にて燃料転換や製造効率の向上を図りましたが、目標は未達となりました。2018年4月1日からスタートした「中期経営計画2020」においては、2012年度～2016年度の平均値をもとにした環境目標を設定しました。CO₂排出量や廃棄物排出量など、継続的な取り組みが必要なテーマを前回に引き続き取り上げ、目標達成に向けた改善活動を積極的に進めていきます。

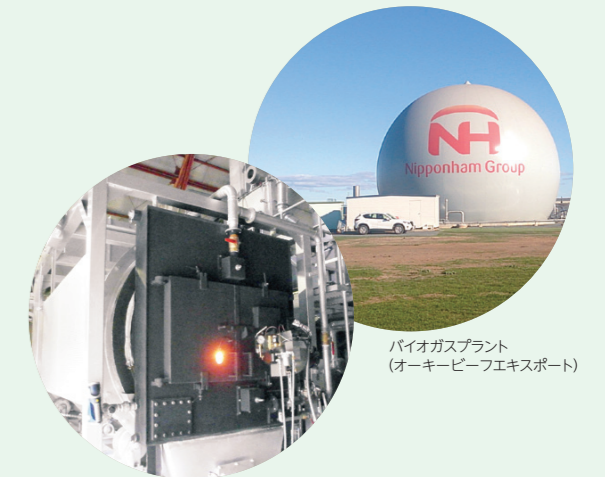
環境負荷低減の取り組み

生産・飼育におけるバイオマスの活用

ニッポンハムグループは、飼育時に発生する排せつ物や、製造過程で発生する廃棄物の有効活用に積極的に取り組んでいます。

鶏の生産や処理を行う日本ホワイトファーム(株)では、鶏の排せつ物を乾燥させた後、施設内にあるボイラーで焼却し、鶏舎の暖房や清掃時に使用する温水の熱源として活用しています。また焼却灰はリンなどの肥料として利用されています。

また、豪州にて牛の処理を行うオーキービーフエクスポートでは、2015年4月よりバイオガスプラントを設置し、工場排水からメタンガスを取り出し、エネルギーとして利用しています。これにより、天然ガスの使用量および購入費年間約3,600万円と、年間約8,000トンのCO₂排出量の削減を実現しています。



鶏糞を焼却するボイラー設備 (日本ホワイトファーム(株))

バイオガスプラント (オーキービーフエクスポート)

産官学共同による水の環境保全

ニッポンハムグループの牛肉事業を担うBreeders & Packers Uruguay S.A.社(ウルグアイ、以下BPU社)は、2017年5月より、行政、大学、企業が協働する「CTAGUA^{*}」のプロジェクトに参加し、水資源の研究を進めています。本プロジェクトは、同国の企業と水資源処理の向上・水に関する課題解決への貢献や水資源に関する科学技術の強化などを目的に実施されるものです。その中でBPU社は牛肉パッカーにおける排水の浄化技術の向上や排水の再利用の促進のほか、水を消毒剤として使用する研究などを進めています。今後も地域社会と連携して、水の環境保全に努めていきます。

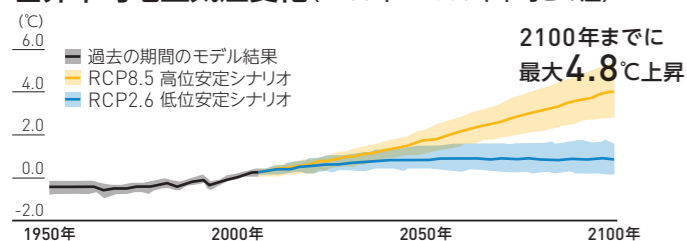
※Centro Tecnológico del Agua: 水研究センター



「CTAGUA」ロゴマーク

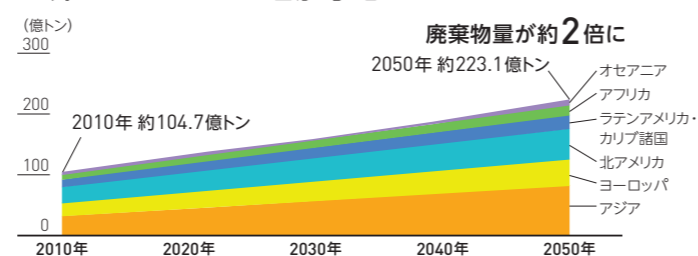
関連する主な社会課題

世界平均地上気温変化(1986年～2005年平均との差)



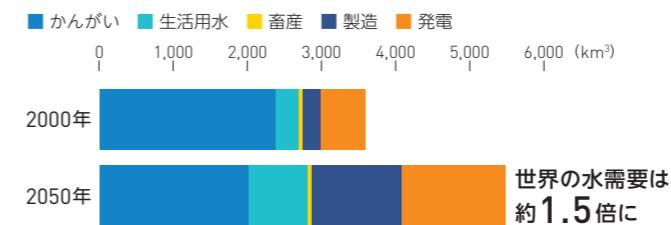
※複数のモデルのシミュレーションによる2006年～2100年の世界平均地上気温の変化
出典: IPCC第5次評価報告書WGI Figure SPM.7(a)

世界のごみの量の増加予想



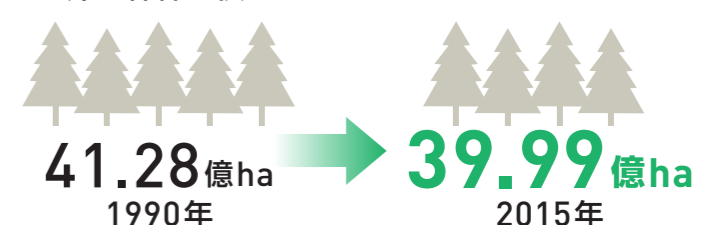
出典: (株) 廃棄物工学研究所「世界の廃棄物発生量の推計と将来予測 2011 改訂版」

世界の水需要予測: 基本シナリオ(2000年～2050年)



出典: OECD Environmental Outlook to 2050(OECD, 2012)

世界の森林面積



出典: 国際連合食糧農業機関 (FAO)「世界森林資源評価 (FRA) 2015」